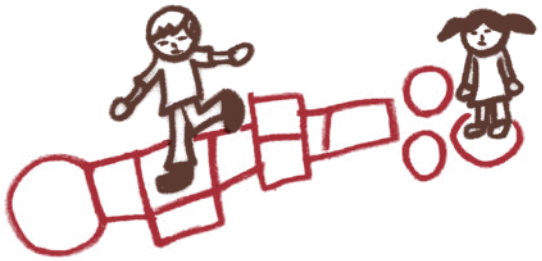
女性とスポーツ

「より速く、より高く、より強く」って何だ！

西宮市



❶

「スポーツ」や「スポーツ選手」の情報は、
私たちの日々の生活に溢れています。テレビ、新聞、インターネット、
SNS、さまざまな広告にも…。

私たちが日ごろ触れているスポーツの話題とは少し異なる視点で
「スポーツ」を考えてみました。

ブライトン・プラス・ヘルシンキ2014宣言

IWG（国際女性スポーツワーキンググループ）

スポーツにおける男女平等をめざし、女性スポーツ発展のための国際戦略。女性とスポーツに関する初の国際会議「第1回世界女性スポーツ会議」（1994／イギリス・ブライトン）において「ブライトン宣言」が採択された。同宣言は、第6回世界女性スポーツ会議（2014／フィンランド・ヘルシンキ）で新たに承認された。日本では2017年、JOC（日本オリンピック委員会）などの団体が署名している。

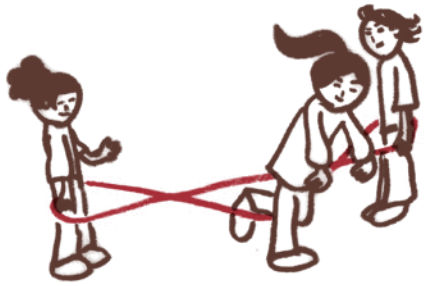
IWGは、「第1回世界女性スポーツ会議」で創設された、政府および非政府組織からなる統合団体。

❷

10の原理・原則

(1) 社会・スポーツにおける公平と平等
(2) 施設・設備の配慮
(3) 学校体育・青少年スポーツにおける平等
(4) スポーツへの参加促進
(5) ハイパフォーマンススポーツへの参加
(6) スポーツにおけるリーダーシップの発揮
(7) スポーツ指導者等に対する教育・啓発
(8) 調査研究及び情報提供における平等
(9) 資源（人的・物的）配分における配慮
(10) 国内・国際活動における連携・協力

参考資料：
スポーツ庁
http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop11/list/1387282.htm
女性スポーツ研究センター
https://www.juntendo.ac.jp/athletes/news/20130208-01.htmlS



インタビュー

「男らしさの学校」という構造を近代スポーツはもっている

熊安貴美江（大阪府立大学高等教育推進機構准教授）

研究分野は、ジェンダー、スポーツ社会学。
共著「データでみるスポーツとジェンダー」八千代出版／「よくわかるスポーツとジェンダー」ミネルヴァ書房／「現代スポーツ評論　女性スポーツの現在」創文企画／「よくわかるジェンダー・スタディーズ」ミネルヴァ書房など多数。

近代スポーツは男性の筋力に合わせた筋力優位主義

現在私たちが享受している近代スポーツは、男性の身体を基準に作られています。平均的に男性が優位になる「筋力という基準」がスポーツを支配しているジェンダー規範であり、男性が女性より上位だ、女性のパフォーマンスは二流であると見せます。また、「男らしさの学校」という構造を近代スポーツはもっています。その「正しい男らしさ」とは「異性愛で、女よりも強く、社会をリードできる」ということです。女性排除と「男らしくない男」嫌悪は顕著にあり、そういうところからもハラスメントは起きています。

1896年第1回目のオリンピックは女性の参加は認められていませんでした。第2回目、女性の参加が認められたのはテニスとゴルフでした。テニスとゴルフは社交の教養でしたので、これなら女がやってもよかろうという審美的な種目から取り入れられていきました。女性の激しい肉体的闘争の表現に対する社会の抵抗は大きく、社会の「女らしさ観」と闘いながら女性は参加の権利を獲得してきました。

スポーツ界は、苦闘の末正しい「真正な男らしさ」を獲得した人たちの集まりです。男らしさは一見いいことのように見えますが、スポーツが男らしさの価値を男性に植えつけて、男女の価値を自明のものとし、女性と「男らしくない男」を排除する仕組みとして機能していることに気づいて欲しいです。

男性にとっても、ジェンダー問題はアイデンティティを疑い、培ってきたものを壊すことになるけれど、リコンストラクション（再建）できるんだよと言いたいです。自分の存在基盤を見直す勇気、それこそ求められる「男らしさ」ではないですか。

競技成績が第一に評価される閉鎖的な組織

メダルを取れば、一選手が暴力を受けようが、セクハラで競技を辞めようが、そんなことは二の次、大したことじゃない。メダルを取る選手を輩出した指導者の実績が第一に評価されます。組織は起きた問題に対応はしているけれど、従来の価値観を支えてくれる圧倒的なサポーターがいるから変える必要はないと思っているんです。こんなに事件が発覚しても地道に変えようという声は聞こえてきません。

競技で優秀な成績を収めた人がその組織のトップ、意思決定者、理事や役員、会長になっていく。女性の意思決定者[*1] は少ないですし、スポーツ分野以外の柔軟な考え方の人を取り込む自由度がないので、一般社会と価値観がずれたまま、非常に閉鎖的です。

「男らしさの学校」なので、男だったら殴られても蹴られても泣き事を言うなという感覚が強く働いています。女子柔道の指導者による暴力問題[*2] が女子選手たちの勇気ある行動で発覚したとき、男子選手もひどい暴力を受けているといわれていましたが発覚しませんでした。男子は競技成績を残せば組織の役員や指導者に抜擢される道もあるため、理不尽な思いをがまんする。堪えて残った人が組織を支えるので組織が変わるのは難しい。女子柔道の暴力事件は女性だから告発できたという面がありました。

体罰やハラスメントは道徳的な関心として社会から認識されるようにはなりました。しかし、選手が健全に能力を伸ばすプロセスを経ているのかを厳しく見る価値観が社会にないから、美しい物語として見せられているその裏で起こっている人権侵害に意識が及ばず、同じことが繰り返されているのです。

指導のスタート地点は人権を守るという当たり前のこと

私も一視聴者として、人間の能力はどこまで開花するんだろうとすごく興味をもちますし、好きなスポーツを見て、一所懸命選手を応援します。しかし、暴力的なことでしか成り立たないのなら見たくないと、みんなが思う必要があります。スポーツ界が他の社会的な領域に比べて暴力の発生率が高いのかどうかはわかりませんが、男性中心、筋力主義、閉鎖的、集団主義、業績主義、商業主義などを考えると、十分ハラスメントが起こる土壌はあり、実際に起こっています。少し前にはアメリカの女子体操選手が幼いときからチームドクターに性的虐待を受けていた、イギリスのユース世代の男子が役職員やコーチに性的虐待を受けていた、と報道がありました。

虐待者が被害者に、あるときは褒美を、あるときは罰を与えて、自分に依存するように仕向け、正常な判断ができない状態に陥れる。トップアスリートは国際大会で優秀な成績を残すことが夢なので、「暴力のような行為」は受けているが「暴力ではない」、性的な被害を恋愛だ、指導の一環だ、と意識を鈍化させ、取り込まれてしまう。もう少しで目標に達成できるかもしれない不安定なときに虐待のリスクが大きくなるといわれています。そんな指導者との関係を「信頼」といったりしますが、美しい間違った言葉で語ってはいけないのです。

学校体育こそが、近代スポーツの価値を変えていける重要な場になる

多くの人が小中、そして高校までは学校体育を経験しますから、身体運動の多様な価値を伝えられる唯一のシステムとして機能することができますが、実際はうまく機能していません。学校体育も「男らしさを育てる学校」としてのポリティクス（政治的な駆け引き）をもっています。

かけっこで女子に抜かされた男子に教師が「女に抜かされて恥ずかしくないのか」と言ってしまう。運動神経が悪いと男らしくないと否定され、女子はスポーツができても女らしくないと可能性をそがれる。男女どちらにとっても否定的なメッセージを与えることになってしまいます。かけっこ

の爽快感とか、順位に関係なくわーと走って騒ぐ楽しさとか、自分自身の身体との対話とか多様な価値を伝えられるはずですが、結局は「どっちが勝った」というスポーツをするから筋力主義も、男子が女子より優位でなければならないという価値観も変わらず、男女に分けることで性的マイノリティに疎外感をもたせ排除することになっています。

男子は競い合って自分の価値を証明するというアイデンティティをもたされているから、疑問をもたない場合も多いですが、女子はあほくさくなり競争から早々に降りて真面目にやらなくなるという研究結果も出ています。

そのほかにも、体育教師の男女比、教員が習ってきたスポーツにもジェンダーステレオタイプがあり、生徒たちに隠れたカリキュラム*3 として伝わることになります。

被害者に二次加害する周りの人たち

私は高校までバレーボールをしていました。ミスをすると体育館の隅に連れていかれ至近距離でレシーブしろとボールをぶつけられました。東洋の魔女*4 以来スパルタ指導がバイブルになり、多くの指導者が継承していました。怒っていたら偉い監督と思われた時代には、高校の大会で選手を並ばせて端からビンタして、それを見て他校の指導者もビンタをする。自分のほうが厳しいと、下らないしのぎ合いをするようなことがあったと聞きます。

何年か前、高校の陸上競技で暴力問題を起こし懲戒処分になった教員が外部コーチとして返り咲き、その後就任した大学チームでもまた暴力事件が発覚して辞めました。暴力事件を起こした指導者が、更正プログラムを受けて良い指導者になって復帰する道を残しておくべきだとは思います。

けれども、被害者以外の部員や保護者が「あの先生の指導を受けたい」と署名運動をしてコーチに迎えている。一人の部員が殴られたくらいで、自分の子どもが指導を受けられなくなるのは困ると、周りの人たちがハラスメントを助長しているんです。

被害者は、お前のせいであの先生の指導が受けられなくなると、二次被害を受け孤立させられる。被害者を無視した署名は、暴力事件でもセクハラ事件でもありました。殴る指導者はお断りと保護者が言うべきですが、少々殴られても子どもの競技成績を伸ばしたいと思う保護者がいるんです。暴力事件を起した指導者を支援する署名運動が起こるスポーツの価値観って間違っていませんか。

「個人を尊重する」ということ

指導で暴力を振るうことについて学生たちに聞くと、「絶対にだめ」「少々は必要」は半々になります。「あのときに殴ってくれたから頑張れました」と正当化するんです。では、授業で期日に達成できないからと殴られたら正当だと思うかと聞くと「?」。同じことがスポーツで起きたらなぜ許されると考えるのでしょうか。

スポーツは大学の名声を得るための手段として定着しています。中学校も高校もスポーツは経営手段に完全に組み込まれてしまっています。教育はそういうものと一線を引かなければいけないのですが。スポーツ推薦で入学して競技成績をあげられなかったり、ハラスメントを受けて辞めていった発言権をもたない人たちは報われているのかと心配になります。学校の名誉のために、勉強はしなくてもスポーツができる子を推薦入学させ、しごいて強くするということをやっているかぎり、人を育てる感覚は養われていきません。

私の中学校での経験です。私の提出物が選ばれて掲示されました。自分では気づいていなかったんですが、名前の字が間違っていたんです。柔道の経験者でガタイのいい生徒から怖れられている教師が、授業でみんなの前で謝られたんです。名前は大事なものだ、それを間違ってしまって本当に申し訳ないと。あんなに怖い教師が子どもに対してこんな風に謝るんだとびっくりしました。この経験はすごく大きくて、個人を尊重するとはこういうことなんだと今でも思い出します。

ある種の男らしさを体現してもかまわないんですが、人間は簡単に踏み誤ります。相手が自分より立場が弱いと思ったらどこか尊大な言動をとってしまう。だからこそ、特に指導者は今の自分はどうだと反芻しないといけないんです。

大学でジェンダー論の授業をすると、居場所がなくて辛かったという性的マイノリティの学生が出てきます。性的マイノリティに関しては、世界の大きな大会でも問題になり、IOC（国際オリンピック委員会）の決定により、トランスジェンダー*5 は「変更後の性」で参加が可能になりましたが、「中間の性」は弾かれてしまうという問題があります。現在は医学的には男女の境界線は分けられないということが明確になりました。にもかかわらず、近代スポーツは性別の境界線を維持しようとする最後の社会装置のひとつかもしれないです。

*1　スポーツ組織の意思決定者比率：

団体名	女性	男性
中央競技団体（61団体／2730人）	8.1%（220人）	91.9%（2510人）
障害者スポーツ団体（43団体／669人）	14.9%（100人）	85.1%（569人）

※（公財）日本体育協会に所属する中央競技団体と、（公財）日本障がい者スポーツ協会（JPSA）に登録している団体のうち、役員名簿を公開している団体（206年1月現在）。

*2　女子柔道の暴力問題：2013年指導陣による慢性的な暴力行為やパワーハラスメントを女子柔道強化選手15人が告発した。

*3　隠れたカリキュラム：学校で公的に認識されているカリキュラムではなく、潜在的なレベルで伝達される性差別的な行動様式。

*4　東洋の魔女：1961年欧州遠征で22連勝した日紡貝塚女子バレーボールチームのニックネーム。監督は「鬼の大松」といわれ、1964年東京五輪では同チームを主体とした「全日本」で出場し、金メダルを獲得した。

*5　トランスジェンダー：「他の側へ、超越して」を意味する「トランス」と、「性」という意味の「ジェンダー」の合成語。出生時に与えられた性別ではない性別を生きる人。

参考資料：
「スポーツとジェンダー」八千代出版、
「岩波女性学事典」岩波書店

インタビュー

オリンピック反対って言い難いですよね

平尾剛（神戸親和女子大学発達教育学部准教授）

研究分野は、スポーツ教育学、発生論的運動学、身体論。
著書「ぼくらの身体修行論」朝日文庫／「近くて遠いこの身体」ミシマ社、共著「日本の身体」新潮社／「合気道とラグビーを貫くもの―次世代の身体論」朝日新書など多数。

オリンピック、本当にそれでいいのという思い

「次、がんばります」「次のオリンピックまでは」と、ありきたりのフレーズをアスリートが繰り返すのは、メディアが“そういう”答えを求めて、“そういう”質問をしているからです。「はっきりした目的に向かって努力する物語」が社会全般に広がっているようですが、明確に将来の目標を決めている人はごく一部でしょう。たとえばうちの大学の学生たちは、体育の教師になりたいけれど、スポーツジムでも働きたい、スポーツ選手にもなりたい、でも食べていけるか、などと逡巡しています。さまざまなことを見据える時間を経て目標は決まっていくこともあるのです。

初めに問題提起したのは建設資金が膨らんでいく新国立競技場建設についてです。『反東京オリンピック宣言』（航思社）を読んで、その裏側を知りましたが、発言するのは1年くらい迷いました。「オリンピック反対」って言い難いですよね。経済効果をいわれる中、景気が悪くなってほしい人はいないですから。どうせやるなら水をさすことはないと考える「どうせやるなら派」が大多数です。でも本当にそれでいいのか、考えてみませんかという思いから発言しました。

選手時代には大会の背景、仕組み、歴史を学ぶ機会はありませんでした。不勉強と言えばそうですけれど、選手は試合に勝つことに集中するように指導されます。研究者になったからこそみえてきたものがあり、声をあげなくてはいけないと表明したらすごく反響がありました。

勝利至上主義が失わせた「自発的創造性」

引退してから、自分のラグビー人生を振り返って初めてスポーツの本質が「自発的創造性」だと気づきました。そこが面白いから19年間も続けられたんだと。

トップアスリートになれば教科書通りの闘い方は通用しないんです。突出した選手は、その自発的創造性に優れていて、それを育んだからこそ高みに至った。全体練習が終わって、もうちょっとこんなキックがしたいなあと一人でボールを蹴っている時間は本当に楽しかった。

勝敗は必要だと思います。勝つために努力するからレベルが高くなっていく。負けたらここが足らなかった、勝ったら今までやってきたことは間違ってなかったと試行錯誤する。そのプロセスがスポーツの本質ですから。でも過度な勝利至上主義はよくありません。さらに言えば、国同士の力関係でルールが変わるというスポーツの現実もあります。

ノルウェーのプロスノーボーダー、テリエ・ハーコンセン選手は「オリンピックがスノーボードを僕たちの手から奪い取ったということを忘れないでほしい」と言っています。入賞が目標になり高得点を目指してミスなく滑ることを最優先し「自発的創造性」が失われたと。競争に勝つことが主題になれば効率的な戦法を選択し、チャレンジする姿勢はその影に隠れてしまう。勝ったり負けたりしながら切磋琢磨するアートな部分が阻害されていることを危惧し、オリンピックから自身が行うスポーツを守るために声をあげました。勝敗は必要ですがスパイスでしかないのです。

部活動の構造的な問題

部活動をみても、学業よりも大会で成績を残す競技力を高めるほうに重きがおかれています。ようやく文部科学省も「部活動の休養日を週2日以上に」と決めましたが、実際には週1回が普通で、正月と盆の数日だけが休みのところもあります。しかも一日の練習時間は何時間もある。勉強しろと言っても無理です。

また、多感な時期の子どもにとっては、レギュラー争いの相手とも試合ではチームプレイをしなければならず心理的負荷が高い。そういったことにも注視しないと教育ではなく単なる選別になります。

暴力的な指導は短期的には効果は上がりますが、自発的創造性に支えられていないので、人としての成長は置き去りにされることは間違いないです。スポーツしかできない人を構造的に作っているのです。不勉強を個人の原因にするのではなく、システム自体の問題として考える必要があります。

精神的にもリスクを抱えるアスリート

某元スポーツ選手の記事を読みました。高校時代から注目され、現役時代には試合に出なかったりエラーをしたらブーイングを浴びる、でも翌日活躍したら賞賛がくる。引退後も注目される。そういう毎日を過ごし、絶えず焦りや不安があったと告白されていました。スポーツ選手なら大なり小なり同じような経験があると思います。

トップまでいったとしても大抵のスポーツ選手は30代半ば長くても40代で引退します。社会的には30代40代は若手です。セカンドキャリアで職についたあとも、スポーツがその人に強いてきた思考の仕方を変えていかないといけない。でも、どこに行っても肩書きに「元」がつく。

僕は引退してスーパーマーケットに行くのが嫌でした。声をかけられたんです「平尾さんですよね」って。「そうか、知ってる人が来るんや」と。いろんな思いもあってネガティブな時期だったので、今はそっとしておいてほしいと思いました。そのとき、スポーツ選手は消費されているんだと思いました。今はちがうことをしているのに「元ラグビー選手」「元日本代表」という肩書きで呼ばれるから、今何ができるかを社会に示さないと僕のこの先はないとずっと葛藤がありました。

スポーツ選手は怪我から逃れられません。スポーツすれば健康になるといわれますが、元選手は全員なんらかの怪我もちです。ライバルが頑張っているから今休んだらあかんと痛み止めの注射を打つ。痛み止めの注射は必ず身体を損ねます。レギュラー争いや同じポジションに活きのいい後輩が入ってくると休んでいられない。精神的にも無理をして競争するわけです。

昨年、興味深いシンポジウムがありました。パネリストは宇宙飛行士とバスケットボールの元日本代表選手でした。宇宙飛行士、トップアスリート、ともに非日常の世界を生き、その後社会に適応できないというのが共通テーマです。極限の非日常を生きると、日常が混濁としてくるんです。そういう負の側面を考える必要があるでしょう。

オリンピックは大義名分か？

メディアを通して僕たちは「スポーツ」を知っているわけで、商業主義と勝利至上主義に乗せられているので「メディアスポーツ」という言われ方をします。トップチームの選ばれたごく一部の人にしかスポットライトをあてないテレビを中心としたメディアの情報が「スポーツのあり方」になっています。スポンサーがついた選手はスポンサーの意向でメディアに取り上げられます。

選手のがんばりを非難しているわけではありません。オリンピックを目標に毎日練習している人を思うと水をさすことになるけれど、福島をはじめ、被災した地域が復興していない状況で何兆円もオリンピックにつぎ込む。高速道路の整備や新しい会場を造ると、そこで生活していた人の生活基盤が壊される。そこでしか生活できない人たちのコミュニティや生活圏が「オリンピック」という大義名分のもと壊されるジェントリフィケーション*1 が起こります。

オリンピック跡地の問題もあります。2016年のリオでもオリンピック後にある施設を学校にするという計画は予算が付かない理由から全然進んでいません。こうした事情は新聞大手五紙がオリンピックのスポンサーになっているからネガティブな情報は得られません。

オリンピックを目標に努力しているアスリート、指導者、競技団体には申し訳ないですけれど、社会全体でみたときに今度の東京オリンピックは返上すべきだと思います。

＊1　ジェントリフィケーション：居住地域の再開発により高級化することで、地価や家賃の相場が上がり、それまで暮らしていた人々が住居を失ったり、地域コミュニティが失われる都市の再編現象。

参考資料：
「コンサイス カタカナ語辞典」三省堂

関連図書紹介

柔道がいかなるものであるかという解釈は、その時々の力関係であり、政治的である

「性と柔　―女子柔道史から問う」

溝口紀子著／河出ブックス／2013

著者は、日本の柔道界の体罰に警鐘を鳴らすため、意図的にフランスの雑誌に論文を発表している。このことからも日本の柔道界の体質が垣間見える。

柔道史を綿密に紐解き、日本の柔道界の歴史と体質に迫る。「柔道」は日本発祥ではあるが、グローバルに「文化変容」することで、世界各国に受け容れられてきた。「弱い者が強い者の力を利用して闘う」イメージは、欧州では女性のアイデンティテイを確立させ、女性参政権の獲得につながっている。翻って日本では、女性を半人前に扱い、国内では1970年代まで100年に亘り「危険」という理由で公式には試合を禁止していた。さらに、世界中で日本女子柔道だけが表紙写真にあるように「白線が入った黒帯」をしめている。黒帯をしめることは許されていないのである。

柔道人口は日本20万人、フランス60万人。フランスでは子どもの柔道死はゼロだが、日本では2011年までの29年間に118人の子どもが柔道が原因で亡くなっている。この数字は他のスポーツよりも顕著に多い。日本柔道界の勝利至上主義体質が子どもの安全よりも金メダルの獲得を優先してきた結果であると断言している。

男性支配構造を積極的に創り出そうとする“主体的な女性たち”

「女子マネージャーの誕生とメディア　―スポーツ文化におけるジェンダー形成」

高井昌吏著／ミネルヴァ書房／2005

全国の野球部（男子校も含む）の70％以上に女子マネージャーがいる。「男性集団と女性」という図式と「境界」という概念を用いて、「女子マネージャー」を考察している。女子マネージャーは1960年前後に現れたが、当初「女子マネージャーに指導的役割を求めるのは無理」と歓迎されなかった。マネージャーは男子であり女人禁制だったが、男子マネージャーは減少の一途をたどる。女子マネージャーが増加した背景には「受験戦争」がある。男子の大学進学率は1960年13.7％、1975年には41％と増え続けた。受験戦争激化によりスポーツ部員数は減り、マネージャーのなり手はなく、女子マネージャーの必要性が生じたのだ。

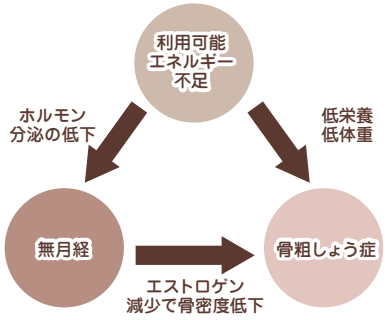
女子マネージャーへのインタビューから、女同士の関係性に否定的で、男同士の関係性を美化する傾向がみえる。「青春ドラマ」で描かれる「男同士の友情神話」を内面化し、男性集団にある「ホモフォビア（同性愛嫌悪）」と「ミソジニー（女性嫌悪）」を共有し、男性支配構造を積極的に創り出している。

「女性集団の女同士の関係性に憧れる男子マネージャー」という図式は成り立ちにくい。その意味でも「女子マネージャー」は、社会における男女の非対称性という問題を反映している。

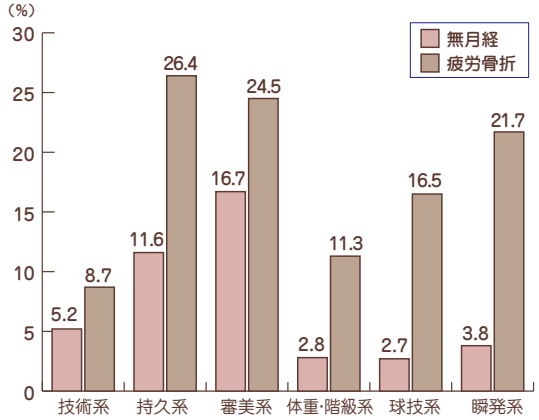
数字からみえる女性アスリートの現状

利用可能エネルギー不足（摂食障害の有無によらない）・無月経・骨粗しょう症

グラフ1 女性アスリートの「三主徴」



グラフ2 無月経と疲労骨折の頻度（競技別）

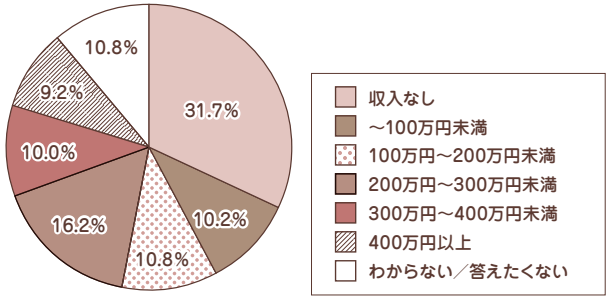


三主徴は、選手生命に大きな影響を及ぼす。疲労骨折は練習量やその強度、低いBMI（痩せすぎ）などで生じるが、無月経に伴いエストロゲン（女性ホルモン）の低下もリスク因子である。審美系の競技に無月経が多いことから、無月経が過度な体重管理による罹患であることは明らかである。

無月経の割合は、日本代表、全国大会・地方大会といった選手のレベルに差はない。また、疲労骨折の割合は、全国大会レベル以下の選手に高く、女性アスリートの健康問題はトップレベルの選手に限らないことが同じ調査から明らかになっている。

金銭面で問題があると約7割が回答

グラフ3 女性アスリートの年収



女性アスリートの収入は、スポンサー企業の有無、競技の種類やレベルによって異なるが、「収入なし」が約3分の1となっている。100万円未満、100万円～200万円未満がそれぞれ1割、400万円以上は1割にも満たない。経済的に恵まれない中で競技する女性アスリートの現状がわかる。

資料出典：「平成30年版 男女共同参画白書」内閣府

性別確認調査

素晴らしい記録には賞賛とともにドーピングの疑いが向けられ、女性には「男性？」という疑惑が加わる

初めての性別確認調査は1948年、イギリス女子陸上競技連盟が医師による女性確認証明書の提出を求めたとされている。1966年ヨーロッパ陸上競技選手権の検査は、医師の眼前を選手が裸で歩き視認される屈辱的なもので強い批判を受けた。

IOC（国際オリンピック委員会）は1968年から口腔粘膜を採取し、染色体「XX型」は女性、「XY型」は男性と判定する方法をルール化し1991年まで実施した。ところが、XY型をもちXX型の女性と同様の身体状況にある症例など、医学検査上の正確性が問われることになった。

人権の観点からも国際的な批判があり、1992年IAAF（国際陸上競技連盟）は検査の廃止を決定した。同年IOCは精確性を高めるとDNAによる検査「ポリメラーゼ連鎖反応検査」をルール化し、2000年以降は疑義事例だけを対象に2011年まで実施した。

2009年キャスター・セメンヤ選手の疑義事件*1 は検査に新しい局面をもたらせた。2011年以降は性別の判定ではなく、テストステロン値（男性ホルモンの一部）を測定する方法が採用されるようになった。テストステロン値が男性下限（10nmol/L）以上の選手は、女性の基準値に低下しない限り女性競技に参加できず、ホルモンを抑制する治療を拒んだ場合は出場資格を剥奪される。

2013年、インドの短距離走のデュティ・チャンド選手は生まれつきテストステロン値が男性の標準範囲のため女子選手としての出場資格を剥奪された。女性として生まれ育ったチャンド選手は、CAS（スポーツ仲裁裁判所）に提訴した。2015年CASは、テストステロン値の規定が科学的に証明できるまで最大2年間、同規定の運用を停止する裁定を下し、チャンド選手の復帰が認められた。

体内で自然に生成されるテストステロンが競技力にどう影響するのか、科学的根拠は明確に示されていない。男女の線引きすることによって、典型的ではない生殖器の形状やホルモン状態をもつ人に対し深刻な人権侵害を起こす結果になっている。男性には同様の規定がないことから女性差別であるという批判もされている。

IOCは2016年リオ・オリンピックを前にトランスジェンダーの選手の出場基準に関し新たな指針を発表した。トランスジェンダー女性（男性から女性へ転換）が女性競技に参加する条件は「性自認が女性であることの宣言」「出場前1年間はテストステロン値が10nmol/L未満に維持」の2つに緩和された。一方、トランスジェンダー男性（女性から男性へ転換）は、制限無しに男性競技に参加できる。

＊1　キャスター・セメンヤ選手（南アフリカ）：世界陸上2009の800m走の金メダリスト。2位（前回の金メダリスト）に2秒以上の大差をつけ、そのシーズン世界最高タイムで圧勝した。筋肉質な体格、低い声などから、IAAFは調査を始めた。IAAFはドーピングではないため金メダルは確定、性別検査の結果は公表されないと最終決定を下したが、メディアにより、子宮と卵巣が無く精巣があり通常の女性の3倍以上のテストステロン値が判明し、両性具有であると報道された。

世界陸上2009の後、セメンヤ選手は非公式に大会出場の自粛を求められていたが、エントリーを強行し、南アフリカ陸連から公式な出場停止処分を受けた。2010年セメンヤ選手はIAAFにこの問題に対する決定を下すよう文書で要請した。同年、IAAFは女性として競技復帰を認めることを公式に発表した。

参考資料：

「よくわかるスポーツとジェンダー」ミネルヴァ書房／小坂美保「スポーツにおける『性別問題』」女性学評論第32号

強さは評価されない“強い女性”
― メディアのつくる女性アスリート像

飯田貴子（帝塚山学院大学名誉教授）
研究分野は、スポーツ社会学、ジェンダー研究。
共著「21世紀スポーツ大事典」大修館書店／「新編　日本のフェミニズム8　ジェンダーと教育」岩波書店、編著「よくわかるスポーツとジェンダー」ミネルヴァ書房／「スポーツ・ジェンダー学への招待」明石書店、監訳「フェミニズム・スポーツ・身体」世界思想社など多数。

20年程前、女子柔道52kg級で活躍した楢崎（旧姓菅原）教子選手の新聞記事（テクスト）を分析しました。彼女は、父親が主宰する道場で柔道を始め、1996年アトランタ五輪で3位、1997年結婚、1999年世界選手権優勝、2000年シドニー五輪2位という成績を残しました。アトランタ五輪では「父と娘」、世界柔道では「夫と妻」、シドニー五輪では「スポーツも家庭も」と表象されていました。つまり一連の記事は、彼女は常に男性に支えられている異性愛の女性であり、「仕事も家庭も」という女性の新性別役割分担を構築し普遍化していくプロセスを物語っていました。このように女性の競技能力を矮小化させ、家父長制社会を永続させるのに有効で安全な女性選手を描写する記事は、男性の記者によって書かれていました。女性記者による記事は、1本だけでしたが、不安を乗り越え再度五輪に挑む自立した女性選手の姿を描いていました。大見出し「迷いはらい銅から銀」も、男性記者による「夫婦三脚」「ミセス」「家事と両立」を含む見出しとは異なっていました。

大手新聞社三社を対象にした2016年の調査では、スポーツ部の女性比率は、記者で13.7%、デスクで6.8%、部長では0%というものでした。20年経ても、送り手の変化は遅々たるものです。これでは女性の視点から書かれた記事が数少ないのも仕方ありません。

楢崎選手の記事に対しては、オーディエンス研究も行いました。読み手は、自分の経験に照らして、テクストを受けとめます。ですから、「家事と両立連続メダル」「子どもを産んでも…女性らエール」の記事を読み、楢崎選手の偉大さを讃えます。実際、家事などしていてはメダルに手が届かないことは明白です。しかし、多くの人々はこの記事に埋め込まれた優先的／支配的な読みを受け入れるため、結婚をして、夫の姓を名乗り、家事も育児も引き受けて、仕事も立派にこなす女性が称賛されるのだという規範をつくっていくのです。

テレビスポーツデーター年鑑によると、報道量ランキング40位内に入る女性は、2016年は13人、2017年は9人です。2016年に女性が多かったのは、リオ五輪の影響です。女性選手たちは、五輪開催年でなくても競技をしているのですが、マスメディアに取り上げられることが少ないのです。この傾向は世界的なものです。女性選手はナショナルなものを背負って競技している場合に注目されるのです。

活躍した選手は、CMに起用されます。CMで、男性選手と女性選手がどのように描写されているかも調査しました。男性選手は、競技の特徴が映像化されているのに対し、女性選手は若さや美しさが強調されているのが多々見られます。

代表的なのは寝具メーカー（2015）、真っ青の空をバックに力強くラケットを振る『進化篇』の錦織圭選手に対し、『京都～京舞』の浅田真央選手は舞妓姿に変身し、はんなりと日本舞踊を披露していました。一方、霊長類最強女子と呼ばれている吉田沙保里選手の代表的な警備会社のCM（2013～2014）では、彼女の強さや逞しさがストレートに表現されず、笑いやユーモラスを付加することにより、女性選手の強さへのからかいを暗示していました。

最近、テレビでよく流されているのが、ヨーグルト飲料のCMです。CMでは、吉田沙保里選手とサッカー界のレジェンド澤穂希さんが新ママを演じています。世界大会13連覇の偉業を達成し、国民栄誉賞に輝く男性選手が、現実ではそうではないのにCMでパパとなって、家族の体調を願う役回りを演じることなどあるでしょうか。

ここにあげたのは、ジェンダーバイアスに満ち溢れたメディアのほんの一例です。けれどもこの記事が、ジェンダー規範の構築にメディアが一役買っていることへの理解に役立ち、メディアを批判的に読み解くことにより、多様な生き方を認め合う社会の形成に貢献できることを願っています。

《関連本・DVD の紹介》
ウェーブ所蔵図書

**「よくわかる
スポーツとジェンダー」**

飯田貴子・熊安貴美江・
來田享子編著
／ミネルヴァ書房／ 2018

DVD
「ブルークラッシュ」
アメリカ／ 104 分／ 2002

**「データでみる
スポーツとジェンダー」**

日本スポーツとジェンダー学会編
／八千代出版／ 2016

DVD
「オフサイド・ガールズ」
イラン／ 92 分／ 2006

ウェーブ

【図書・資料コーナー】

男女共同参画に関する情報を収集し、提供しています。
□貸出：月～土 10:00 ～ 17:15
　図書・雑誌…5 冊 2 週間
　ビデオ・DVD…1 本 2 週間
　（ただし、資料整理期間、休日、祝日、
　12 月 29 日～ 1 月 3 日は除く）

【女性のための相談室】

□電話相談：0798-64-9499
　月・木／ 10:00 ～ 16:00 ／一人 40 分程度
□面接相談：要予約／火・水・土
　10:00 ～ 16:30 ／一人 50 分
□法律相談：要予約／第 3 金
　14:00 ～ 17:00 ／一人 30 分

【女性のためのチャレンジ相談】

再就職・起業・地域貢献の実現に向けたアドバイス、ニーズに応じた支援施設の紹介など、キャリアコンサルタントによる相談です
□面接相談：要予約
　第 2 火（偶数月）／ 10：00 ～ 12：00
　第 3 水（奇数月）／ 13：00 ～ 16：00
　一人 50 分／託児付き

※相談予約　0798-64-9498（月～土／ 9:00 ～ 17:15）
（ただし、休日、祝日、12 月 29 日～ 1 月 3 日は除く）

西宮交流フェスティバル
一緒にしよう！ みんなのスポーツ

年齢、性別、障害に関わらず、気軽にスポーツ体験を楽しんでいただくイベントです。詳細は市政ニュース、HP 等でお知らせします。
（スポーツ推進課：0798-35-3567）

女性とスポーツ

「より速く、より高く、より強く」って何だ!

発行：西宮市男女共同参画センター ウェーブ
　　〒663-8204
　　西宮市高松町4-8　プレラにしのみや4Ｆ
TEL.0798-64-9495　FAX.0798-64-9496
http://www.nishi.or.jp/navi/ln_0009600000.html
https://www.facebook.com/nishi.wave/

発行日：平成31（2019）年3月
イラスト：宮武小鈴